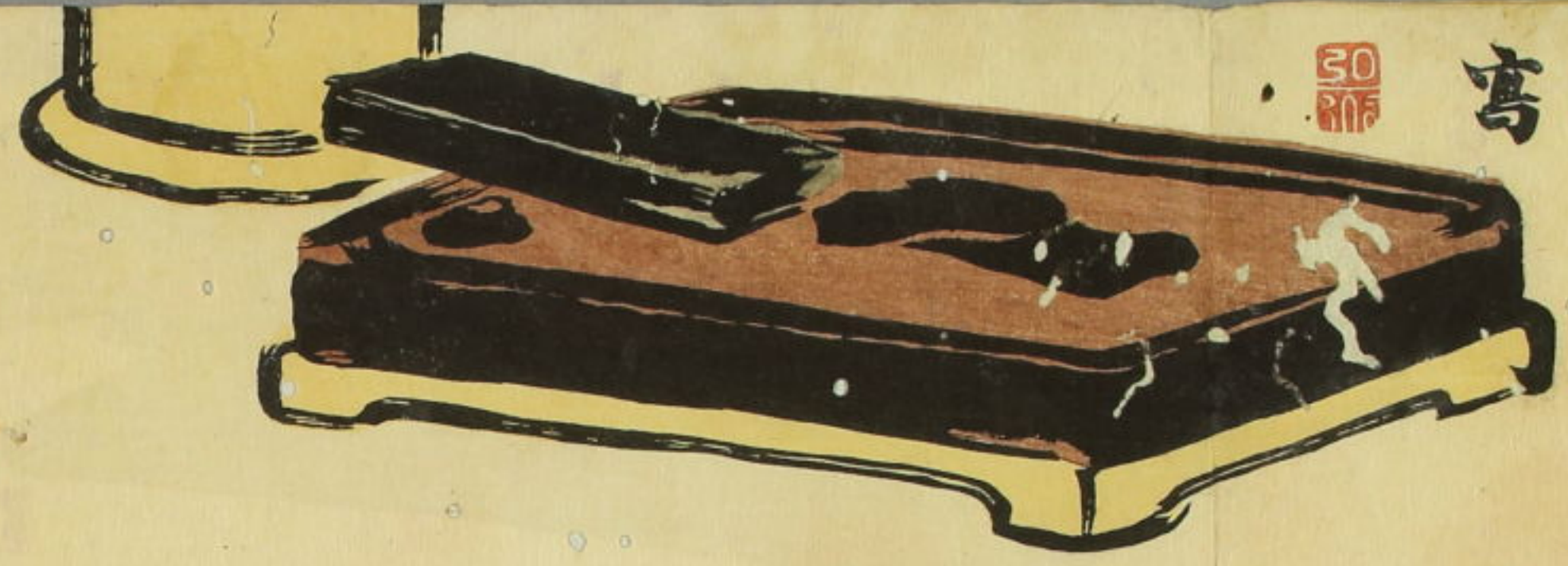




私道書



新島和菜のけのむし刺して  
月がわく夜はまがりのまはる  
涼しき月夜は月夜は月夜  
安丸 千除

送別

庵つや青蓮く又りて  
糸うけや都へ送る角力反  
少とまきう峰の日くけは  
湖大 子敬

中へ入るや橋子一さの秋の  
さくさく本末の飲を后の月  
月あけく節は言や茶のむ  
胡色 見負

月影のあもひくの縁はむき  
底うすし月よおる手糸面  
益のぬきととぬれぬ味の内  
有瓶 蒼少

名月やまてり給服のさる  
源くまの里如月足の巻能  
月入る新ししハを原  
旋子 水月

山をる人影中うとつ月夜  
経飛とわたり舟のまきま  
月夜や都にあつ人の影  
枕月 水月

月を入ぬ庵も満よつ月の  
志はくくつて押ゆや月れ舟  
湖大 子敬

秋月也三月の中れは音  
高しあやかきう都の早月夜  
麻中れかて来て来は  
木香 柳香

舟乃もも砂地傳し以幸烟  
春之月山  
毎に春して三更も道ぬ  
壬申秋

